

## サステイナブルを指向するファッション

### ◆「ベンベルグ」がGlobal Recycle Standard (GRS) 認証取得

旭化成は2017年5月に、ベンベルグが環境配慮型繊維素材を普及啓発するNPO Textile ExchangeからGRS認証を取得したことを発表した。GRSは、製品のリサイクル材料含量やトレーサビリティを公的に裏付ける環境認証プログラムである。

ベンベルグは繊維にならない綿実の周りの産毛のみを原料に使う再生繊維で、溶媒に溶解した原料溶液を細孔から紡糸して製造される化学繊維の1種である。化学薬品の管理や環境に配慮したトレーサビリティのある生産体制が確立されている点、生産工程での消費エネルギーの40%を再生可能エネルギーで賄い、工場廃棄物の98%以上を再利用している点などが評価された。

### ◆素材選びには、色合いや風合いと同様に、第三者の認証も重視される

リサイクルの他、天然素材の使用でも環境保全認証を受けた商品に関心が高まっている。国内でも興和グループのテネリータなど、環境保全の国際認証Global Organic Textile Standard (GOTS) を受けたオーガニックコットンブランド事業が展開されている。GOTSの認証要求事項には、欧米などが定めた認証有機農法で栽培された原料や認証原料で作られたオーガニック繊維を一定比率以上製品中に含んでいること、遺伝子組み換え材料を含まないことその他、製造や加工工程の環境影響、化学薬品の使用、生産のトレーサビリティなどが規定されている。

また、欧米企業との取引では製品安全の認証を求める企業が多い。素材選定で重視されるのは色合いや風合いだが、エコテックス・スタンダード100など、欧州の規制もカバーする安全認証を取得していることも重視される。エコテックス・スタンダード100は、特定芳香族アミンなどの人体に有害な化学物質が含まれていないことを分析試験結果に基づき証明する、繊維製品の安全認証である。

### ◆ファッション（服飾）分野でサステイナブル（持続可能）への指向が進む

17年9月のミラノ・ファッション・ウィークでは、サステイナブルへの貢献度の高い企業やデザイナーの表彰式「グリーン・カーペット・ファッション・ア

## ハイライト

ワード」が初開催され、持続可能な社会に貢献する事業を積極的に創出したグッチャリサイクル素材のみを使用してコレクションを展開するデザイナーのティツィアーノ・ガルディーニなどに賞が贈られた。この様にサステイナブルを訴求する動きは、企業経営の安定とブランド価値向上の点からも広がりを見せている。

そのようななか、5月のコペンハーゲン・ファッション・サミットでは、服飾分野のサステイナブルレポート” PULSE OF THE FASHION INDUSTRY “が、Global Fashion AgendaとThe Boston Consulting Groupから発表された。世界人口の増加に伴い服飾産業は拡大し、30年にはサステイナブル活動が生む利益は年間1,600億ユーロを狙えるが、不十分な取り組みではその半分にも満たない額にしなければならない、と試算している。レポートでは、デザインから最終消費に至るバリューチェーンを8つに分け、今後の取り組み課題を8つの観点から優先度も含めて示している。

表 バリューチェーンにおいて、今後取り組むべき8つの観点とその優先度

		デザイン・商品開発	繊維原料	繊維加工	縫製	輸送	小売	着用	処分
環境	水	1 (最優先)	2 (優先)	2 (優先)	4	5	5	3	3
	エネルギー	3	2 (優先)	1 (最優先)	3	3	3	2 (優先)	3
	化学薬品	2 (優先)	2 (優先)	1 (最優先)	4	5	5	3	5
	廃棄物	2 (優先)	5	3	3	3	3	3	1 (最優先)
社会	労働者待遇	4	3	1 (最優先)	1 (最優先)	4	3	5	5
	健康・安全性	4	3	1 (最優先)	1 (最優先)	4	5	5	5
	地域対話	5	5	4	3	5	3	5	5
倫理	倫理的行動	2 (優先)	2 (優先)	4	3	5	3	4	3

繊維加工では、再生可能エネルギー活用、染色排水問題の解決、低賃金労働や労務性差・児童就労などの問題の解決、化学薬品暴露に対する安全確保が、最優先課題である。また、衣服着用と処分の段階での課題として、洗濯・乾燥・アイロンがけに要するエネルギーの削減と繊維原料へのリサイクルが挙げられている。

デザインでは、糸の染色や化学処理を控えることや、混紡ではなく単一素材の繊維を用いてリサイクル性を考慮することを、デザイン当初から織り込むことが求められている。また、素材に綿を選ぶことについては、栽培で水を大量消費する点から、デザイナーに対して警鐘を鳴らしている。

1990年代まで100年以上、繊維第一位の生産量だった綿も、今後の有り方に見直しが迫られている。種々の意見を取り入れながら、サステイナブルの模索が続く現場に注目したい。

【袴家淳雄】